

【第六回つばきの国俳句大賞】

二月十四日～十九日、国重要文化財・萬翠荘で、伊予つばき協会主催による「第四十七回つばき名花展」が開かれた。昨年の上旬は気温の低い日が続いたため、今回は例年より一週間遅くしての開催となった。

今年は、昨年以上に寒い日が続き、咲き具合が心配されたが、鉢物約一七〇点余りが展示された。愛媛の旧家の庭で発見された椿や、薔薇のような香りのするもの、外国産の椿、新品種など貴重な種も多かった。どれも会員の皆さんが丹精込めて育てられたもので、見応えのある素晴らしい展示だった。

今年もこの椿展の開催にあわせて椿の俳句の募集があり、「つばきの国俳句大賞」には、百六句、五十五人の応募があった。選者は、八木健、山口聰（伊予つばき協会会長）、小泉和子（同理事）で、最終日に結果発表と表彰があった。副賞として、大賞と優秀賞三点の俳句を八木健がアートにして贈呈し、「子規」という名前の苗木や道後の入浴券も贈られた。

□大賞

しりもちをついてしまった落椿 森岡香代子

椿は花びらが散らず、萼を下にして花が上を向いたままで落ちる。なるほど、うつ伏せではないね。その様子を「尻もち」ととらえたところが楽しい。一般的に、擬人化は物や動物を人に例えることと考えられているが、対象そのものになりきると佳句ができる。この句も、作者は椿の気持ちになりきったに違いない。優れた観察眼の持ち主でもある。

□八木健賞

お社を誰が名付けた椿さん 相原共良

この「お社」とは、愛媛県松山市の伊豫豆比古命神社のことである。境内一帯に椿が自生していることから、地元では親しみを込めて「椿神社」「椿さん」と呼ばれている。この神社の御祭神の一柱、愛比売命（えひめのみこと）は古事記にも登場する神様だが、“愛媛”と県名の由来にもなっている。

□伊予つばき協会会長賞

散りたくない紅い椿が駄々こねる 吉川正紀子

まだ寒い時期に咲く紅い椿は、きっぱりとした性格で、強い意志も持ってい

るように感じる。まだまだ咲いていたい、落ちてたまるものかという気概が伝わってくる。自分自身を椿に重ねてもいるのだろう。「駄々こねる」の人間臭い表現がいい。

□伊予つばき協会賞

ランドセルの列を見つめる大椿 上山美穂

椿の木の側を通る小学生の通学風景を見ていて、この句を思いつかれたそうである。優しいまなざしで子ども達を見ているのは、椿であり、作者自身でもある。椿は通学路に立って、毎日子ども達を見守り、花をつけては楽しませてくれているのだ。

□佳作

あつかんの湯気のむこうに赤つばき	二神照子
落ちてなほ彩失はず寒椿	西野周次
紅椿に語り今日の日はじまれり	源のぶ子
弓絞る黙の一瞬寒椿	力武由紀子
一碧の空従へて紅椿	山西哲子
寒椿雑念持たぬ白さかな	中野サヨ子
廃屋にビクターの犬藪椿	桑田愛子
山門の参拝を待つ寒椿	小笠原恵子
野良ばえの低き椿や今朝の吉	鶴崎尚子
椿の種割れる音聴く人もなし	道満光子
太鼓判もらふ挿木や玉媛種	鶴崎 孝
茶筌振る静寂いちりん白椿	一色千代子
マンホール市花の椿やあざやかに	小笠原満喜恵
瀬戸の島武士の名の椿咲く	井上繡子
椿さん太鼓の鼓動つばき落つ	清水研作
草むしりしんどいと見る赤椿	田代善二
椿展千の蕾も真新し	脇塚耀子

コロナ禍を毅然と咲くや紅椿

日根野聖子

落椿見上ぐる空の広さかな

渡部美香

椿展赤や白やの決めポーズ

野原加代子

右から：小泉さん、相原さん、吉川さん、八木、森岡さん、
窪田定義さん（伊予つばき協会副会長）、上山さん



第六回つばきの国俳句大賞 伊予つばき協会会長賞

散りたくない

紅い椿が

駄々こねる

吉川正紀子



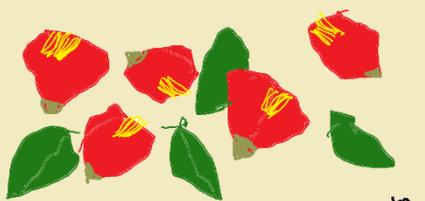
第六回つばきの国俳句大賞 大賞

しりもちを

ついてしまった

落椿

森岡香代子



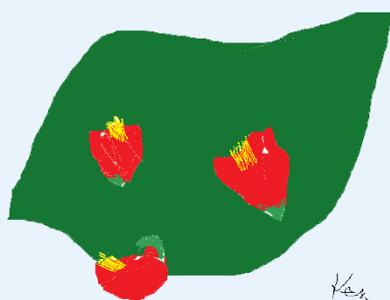
第六回つばきの国俳句大賞 伊予つばき協会賞

ランドセルの

列を見つめる

大椿

上山美穂



第六回つばきの国俳句大賞 八木健賞

お社を

誰が名付けた

椿さん

相原共良

